

生態系活用型農業におけるホウレンソウを中心とした軟弱野菜の作付体系						
【要約】生態系活用型農業において軟弱野菜を周年生産する場合、夏期を除いてホウレンソウが作付けでき、夏期にはハネギが適している。						
三重県農業技術センター・栽培部・野菜栽培担当				連絡先	05984-2-6359	
部会名	野菜・花き	専門	栽培	対象	葉茎菜類	分類 普及

【背景・ねらい】

生態系活用型農業で主作目としてホウレンソウを周年栽培する場合、夏期はホウレンソウにとって不適な環境条件であるので病害虫の被害も受けやすく収量も少ない。そこで夏期はホウレンソウを作付けせず、経営を考慮してこれに代わる有利な作物を選定した。

【成果の内容・特徴】

- ①本試験は、生態系活用型農業の目的に従い、紫外線カットフィルム、寒冷紗被覆による物理的防除、ぼかし肥の溝施用による窒素30%低減条件下で行った。
- ②ホウレンソウは、病害虫の被害は少ないが、夏期は高温対策を徹底しないと低収である(表1)。
- ③チンゲンサイは、軟腐病の発生、コナガ、ヨトウガの食害が他作物より多く、生態系活用型農業には不適である(表1)。
- ④ナバナは、4℃、2週間で花芽が誘導でき、播種後約60日で収穫できるが、収量は一般的な秋冬期作の4割程度しかなく、コナガ、ヨトウガの食害も多く、夏期には不適である(表1)。
- ⑤ハネギは、収穫まで移植後約50日要するものの、病害虫の被害が全く認められず、収量も多いことから、夏作に適している(表1)。
- ⑥生態系活用型農業で軟弱野菜を周年栽培する場合、6月中旬から9月初旬の高温期にはハネギを作付け、この時期以外でホウレンソウを年に4回作付することが可能である(表2)。

【成果の活用面・留意点】

- ①ハネギは、移植しても収穫までの日数がかかるため、全圃場でハネギを作付するよりは、圃場の一部に作付し、残りの圃場には太陽熱消毒を行うのが良い。

【具体的データ】

表1. 夏作ホウレンソウ、チンゲンサイ、ナバナ、ハネギの収量

作目	品種 系統	播種日 月/日	定植日 月/日	収穫日 月/日	病害虫被害程度		収量 g/m <sup>2</sup>
					病気	害虫	
ホウレンソウ	マシマシ	7/7	7/20	8/27	0	3	234
チンゲンサイ	CR青都	7/1	7/18	8/24	3	45	3113
ナバナ	早生	7/1	7/27	8/28	0	25	171
ハネギ	夏っこ	6/28	7/15	9/3	0	0	2610

注) 各作目ともセル苗による移植栽培(ホウレンソウ、チンゲンサイ、ナバナは200穴、ハネギは288穴)

ナバナは、平成4年産種子を4℃暗黒下で催芽、播種、育苗を2週間行ったもの。

病害虫被害程度 =  $\sum(n_i * DI) / 4n * 100$ 。指数DIを0:無、1:軽、2:中、3:多、4:甚。

表2. 作付体系

作目	月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
ホウレンソウ		○	—	■									
ホウレンソウ					○	—	■						
ハネギ								○	—	△	—	■	
ホウレンソウ											○	—	■
ホウレンソウ		—	■										○

注) ○: 播種、△: 定植、■: 収穫

【その他】

研究課題名: 西南暖地における軟弱野菜の生態系活用型周年生産体系の確立

予算区分: 地域重要新技術

研究期間: 平成5年度(平成4~5年)

研究担当者: 山田信二・西口郁夫

発表論文等: